

平成 30 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370528

研究課題名(和文) 訓点資料を利用した日本語音節構造史の研究

研究課題名(英文) The history of Japanese syllable structure using the Chinese-Japanese glosses

研究代表者

肥爪 周二 (Hizume, Shuji)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授

研究者番号：70255032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、平安・鎌倉時代の訓点資料を中心とした、一次資料を利用することにより、日本語の音節構造の歴史を明らかにしようとするものである。研究代表者は、開拗音・合拗音、二重母音・長母音、撥音・促音、清音・濁音のそれぞれについて、従来の学説とはかなり異なる見解を提出してきたが、本研究においては、それらを補強あるいは修正するための具体的なデータを収集した。この成果は『日本語音節構造史の研究』として、2018年度中に刊行予定である。

研究成果の概要(英文)：This research aims to clarify the history of the Japanese syllable structure by using the primary material, mainly the Chinese-Japanese glosses of the Heian and Kamakura period. The research leader has submitted quite different views from the conventional theories about -j- medial glide and -w- medial glide, diphthong vowels and long vowels, syllabic nasal and geminate consonants, surds and sonants. In this study, the research leader collected data for reinforcing or modifying his past research. This achievement will be published as "Study of Japanese syllable structure history" during FY 2018.

研究分野：日本語音韻史

キーワード：音節構造 拗音 長母音 二重母音 促音 撥音 濁音 連濁

1. 研究開始当初の背景

日本語の音節構造の歴史に関して、研究代表者は、拗音、二重母音・長母音、撥音・促音、清濁の対立、それぞれについて、従来の研究とは異なる、独自の解釈を提案してきた。しかし、それらの提案は、主に先学により蓄積されてきた言語データと、理論的な考察に大きく依拠しており、特にデータに関しては不十分な面があった。訓点資料研究に関しては、築島裕『平安時代語新論』（東京大学出版会、一九六九）など、先学による大きな達成があるが、それらは、当時の関心に即した形でデータが収集・整理されたものであり、研究が進展すれば、足りない部分が、さまざまに生じる。その後の訓点資料研究が、書誌的な研究に重心を移していったためもあり、データの蓄積という意味では、この五十年は、量的には進展したが、質的には停滞していたとさえ言える。言語データは、目的意識に応じてしか集積されないものであるため、マニュアル化された既存の調査項目には様々な欠落があるからである。

研究代表者の日本語音節構造史についての考察は、音節頭から音節末まで出揃い、自説を構築・補強するために不足しているデータも明確になったため、機は熟していると言える。同時に、築島裕編『訓点語彙集成』（汲古書院）が完結し、取捨選択される以前の、用例の生データを参照することが可能になり、見通しを立てやすくなった。

2. 研究の目的

本研究計画では、公共機関・社寺に所蔵される訓点資料・片仮名文資料、また影写本・写真・画像データ・市販される複製・活字翻刻などを調査し、研究代表者の構想に必要なデータを収集・拡充することにより、研究代表者の音節構造史を修正・発展・完成させることを目的とする。

3. 研究の方法

研究代表者の問題意識に即した事象について、文献資料から用例を収集する。そのための手順としては、通常の方法の他、特に、以下のような方法を採用する。

築島裕編『訓点語彙集成』（全九巻、汲古書院）を通読（合計三回）することにより、優先的に原本調査をするべき訓点資料をリストアップする。

石山寺（年2回）・東寺（教王護国寺）（年1回）については、定例調査の機会を利用して、訓点資料の原本調査を行う。その他の訓点資料については、機会を得次第、原本調査を行う。原本調査の機会を得られないものについても、複製本・写真などにより調査を行う。

ここ数年で急速に充実してきた日本語史関係のコーパスを適宜利用し、優先的に調査すべきジャンル・資料を選択し、通読的な調査を行う。

上代語資料については、注釈書において校訂された清濁を鵜呑みにすることなく、『古事記』『日本書紀』『万葉集』の原表記の万葉仮名に遡って、慎重に検討する。

4. 研究成果

以下、原本調査した訓点資料などから、注目すべき内容を持つもの限定して、特に報告する。

石山寺において、『成唯識論』寛仁四年（一〇二〇）点の調査を継続的に行った。当資料は、量的撥音便「寧イカムそ」「无（く）ナムヌる時を」「无（く）ナム、か故に」、m音便「特タノムて」のように、すべてム表記になり、促音便も「妄 イツハ ムて」「涉 ワタ ムて」もム表記になる特異な資料であるが、漢字音の鼻音韻尾も、n韻尾「渾クウム」「殷イム」、m韻尾「焰エム」「耽タム」と、いずれもムで表記される資料である。また、『守護国界主陀羅尼經』平安中期点は、開拗音も合拗音も、「傾カウ、捨サ、場タウ、濁トク、灌カム、冠カウ、獲カク、活カ」等、すべて直音で表記する、珍しい資料である。

東寺においては、『三論祖師相伝』一帖鎌倉初期点が注意された。この資料は、「噓 ムセ ムテ既（に）吐（く）コトヲモ得不（るか）如シ（如既不得吐）〔一〇ウ〕」「字号 ヨハ ムテ龍樹ト曰（ふ）〔也〕〔字号曰龍樹也）〔一ウ〕」など、m音便・八行四段動詞音便形は「ム表記」、量的撥音便・促音便は「零表記」を原則とする資料である。例外はm音便の無表記、「翰 フテ」「蒹 ツ、テ」の二例であるが、いずれもウ段音の直後の例であり、m音便形ではなく、ウ音便形の短表記である可能性が残る。また、本資料は伝記であるため、仏書であるにもかかわらず漢字音には、漢音系字音が用いられる（歴 レキ、嘗 エイ、成 セイ、興 キヨウ、婉 エン など）。『大日経疏音義』（一冊・室町後期写）は、『大日経疏』の巻音義で、単字・熟語を掲出し、字音（仮名・声点）和訓を注記する。字音は原則として呉音系字音であるが、漢音系字音も、かなり目に付く。また、「経 ケイ、キヤウ」「激 ケキ、キヤク」のように、呉音・漢音系字音を併記することも多い。和訓の音便形として注意されるものに、「地 ヨトコロ」「唯 ウケタマハヌ」「拱 タンタイテ」等があった。また、「逐之 シタカムテ」と、八行四段動詞の音便形の表記に「ム」を用いた例があるのが注意される。他の八行四段動詞の音便形は、「買 カフテ」「儀 ヲモフテ」「効 ナラフテ」等のフ表記、「奮 フルウテ」「人二面 ムカウテ」のウ表記、「導 シタカツテ」のツ表記、「招召 マネキヨハテ」の零表記の例が指摘できる。『三教指帰巻下』一卷・建久八年（一一九七）写の漢字音は、概ね漢音系字音によるが、呉音系字音も混じる。両音の併記もある。「茶（平）（右）ト・（左）チヤ 蓼（上）レウ」の例は、高山寺蔵『恵

果和尚之碑文』(延久承暦頃写)に「茶蓼 チヤレウ(五オ)」東京大学文学部国語研究室蔵同書(長暦天喜頃加點か)では、「茶蓼 トレフ(六五)」となっているのが思い合わされる。『金剛界儀軌上』一帖・天永二年(一一一一)点は、「我蓮花の身と為 ナ ヌト(我為蓮花身)[一六オ]」「金剛の三業をモテ(金剛三業)[五オ]」「世間を救 スクム下へ(救世間)[五ウ]」など、量的撥音便・促音便は「零表記」、八行四段動詞音便形が「ム表記」される資料である。『吉祥天法』一帖・保延三年(一一三七)点は、「踏 フムテ」「訖 ヲハ ンナハ」「握 ニキ テ」など、m音便を「ム表記」、量的撥音便を「ン表記」、促音便を「零表記」する資料である。

山梨県立博物館において、山梨大式『華曇文字攷』の調査を行った。この悉曇学書は学界未紹介の資料で、唐音を利用して、日本に伝来する伝統的な梵字の発音を修正しようとする研究書である。pa のパ、ha をハに修正するなど、悉曇学書として一定の成果を上げているとともに、語頭のガ行音と語中のガ行鼻濁音が異なることを、明確に指摘した、日本語研究史上、もっとも早い著作としても貴重である。

この他、研究代表者が、本計画期間以前に公表した論文について、用例を拡充するための調査を行い、一定量の必要なデータを得ることができた。

(1) 拗音の分布の偏りに関わる用例データ。シャ・ジャ以外のア段拗音として、例外的に存在する「茶(チャ)」(一般的には慣用音とされる)をめぐる、平安・鎌倉時代の実例を収集した。また唇音と拗音の組み合わせの制限(ヒユ・ビユ・ミュがまれ、ヒョ・ビョ・ミョは伸ばすもののみ)をめぐる、この例外となる実例を、平安・鎌倉時代の資料から収集した。また、開拗音と合拗音の分布の差、表記の歴史の差(開拗音が平安初期から仮名二字による表記が普及していたが、合拗音の仮名二字による表記は、それに大きく遅れた)などを手掛かりに、日本語への受け入れ方の差(開拗音は、いったん二単位に分割して受容し、必要に応じて圧縮することも可能である「分解圧縮法」、合拗音は、平安初期のコ・ゴ甲乙の別を、子音の円唇性の有無の対立と解釈し、その子音と母音音素の結合の「あきま」へ受容した)を推定した。また、サ行・ザ行開拗音の、日本語史における特異な振る舞い、つまり、直音表記が取られやすいこと、拗音仮名の使用が好まれたこと、ウ段短拗音がシュ・ジュに限定されることなどが、サ行・ザ行子音の音価の幅に起因するものであり、日本語への受け入れ方が、開拗音と同様の「分解圧縮法」的な面と、合拗音と同様の「一単位」的受容の面の双方に通じる性質を持っていたからと説明した。

(2) 二重母音の史的变化、長母音の成立に関わる用例データ。/CVu/音節が長母音化してゆく過程を明らかにするための、データの

収集・整理を行った。また、そうした文献上の事実を、音韻論的にどのように解釈すべきか考察した。また、いわゆる江戸語の連母音音価(二重母音・母音連接の長母音化)を、具体的な江戸語データを分析しつつ、音節構造史の立場から検討し、これが音韻レベルの音節構造よりも、音声レベルの条件が優先されることがあること、理論的に想定される結合度が、必ずしも母音の融合のしやすさとは連動しないことなどを明らかにした。

(3) 撥音・促音(特に、m音便・量的撥音便・音便に関するもの、オノマトペの音配列則の史的变化に関するもの)に関わる用例データ。主に訓点資料から上記のデータを収集・整理した。特に、国語音の分析を先行させた上で、漢字音の受け入れ方を検討する手法を提案・実践した(当然の手法であるように、実際には、ほとんど行われていなかった)。その結果、学界周知の資料の漢字音の表記についても、従来とはまったく異なる見え方をして示された。具体的には、漢字音のm韻尾が、国語音のm音便の撥音の支えが存在したことにより、表記も安定していたのに対し、漢字音のn韻尾は、国語音の量的撥音便が、音声としては[-n]で実現することがあったものの、それ自体が発音ターゲットではなかったため、日本語母語話者には捉えにくい音であったため、表記も流動的な存在であったと解釈した。特に、m韻尾とn韻尾の区別が混乱しているように見える資料であっても、m韻尾は安定、n韻尾は不安定という形で表記が対立しているケースがあり、そうした見かけ上の混乱は、音韻論的な意味での混乱ではなかった可能性が高いことを示した。また、「ひいやり」「ふうわり」型オノマトペが、江戸時代以降に「ひんやり」「ふんわり」型に変化したことを、実例を整理しながら指摘し、その背後にある撥音の史的変遷について考察した。

(4) 日本語の連濁現象に関わるデータの収集・整理を行った。特に歴史的に連濁/非連濁が変化したものを整理し、それらとローゼンの法則との関係などを検討した。また、m音便の後の清濁が問題となる事例を収集し、それらの清濁を決定する手掛かりとなる用例を探索・検討した。また、龍暦の仮説(上代語では前項の末尾が濁音で或時にも連濁が起こらなかった)の仮説を、『古事記』『日本書紀』『万葉集』の原表記まで遡って、どの程度の根拠がある仮説であるのか、再検討をした(現行の諸注釈書は、演繹的に清濁を調整して本文を提供している)。その結果、龍暦の仮説には、従来考えられてきたよりも、かなり多くの反例・疑問例が存在することを明らかにした。さらに、連濁現象に隣接する多岐にわたる問題についても、それぞれ考察を進めた。

以上の成果を総合したものは、『日本語音節構造史の研究』として、二〇一八年度中に、刊行予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9件)

肥爪周二「撥音史から見た漢字音の三種の鼻音韻尾」(『訓点語と訓点資料』第140輯、訓点語学会、査読有、2018.3、pp.1-21)

肥爪周二「音節構造史から見た江戸語の連母音音訛」(近代語学会編『近代語研究』第20集、近代語学会、査読有、武蔵野書院、2018.3、pp.213-233)

肥爪周二「音韻史 拗音をめぐる2つのストーリー」(大木一夫・多門靖容編『日本語史叙述の方法』、査読無、ひつじ書房、2016.10、pp.75-94)

肥爪周二「『ひいやり』『ふうわり』から『ひんやり』『ふんわり』へ 撥音史からの検討」(近代語学会編『近代語研究』第19集、近代語学会、査読有、武蔵野書院、2016.9、pp.35-54)

肥爪周二「日本漢字音史から見た法華経」(浅田徹編『日本化する法華経』アジア遊学202、査読無、勉誠出版、2016.9、pp.99-111)

肥爪周二“Some Questions concerning Japanese Phonology: A Historical Approach”(『ACTA ASIATICA』111、東方学会、査読無、2016.8、pp.19-33)

肥爪周二「橋本進吉」(『日本語学』第35巻4号、特集「人物でたどる日本語学史」、査読無、明治書院、2016.4、pp.120-123)

肥爪周二「八行子音の歴史 多様性の淵源」(『日本語学』第34巻10号、特集「昔の人はどのように話したか 復元音の世界」、査読無、明治書院、2015.8、pp.34-41)

肥爪周二「山県大弐の悉曇学と国語音声観察」(近代語学会編『近代語研究』第18集、近代語学会、査読有、武蔵野書院、2015.2、pp.141-161)

[学会発表](計 5件)

肥爪周二「サ行拗音 開拗音と合拗音のあい」口訣学会、大邱カトリック大学校(韓国)、2017.8.16

肥爪周二「撥音史から見た漢字音の三種の鼻音韻尾」訓点語学会、京都大学、2017.5.21

肥爪周二 シンポジウム「第17回国際日本学シンポジウム、日本化する法華経、日本の典籍としての『法華経』、日本漢字音史か

ら見た法華経」お茶の水女子大学、2015.7.5

肥爪周二 シンポジウム「第60回国際東方学会議、日本語研究の現状と課題、日本語音韻の諸問題 史的研究からの解明」東方学会、日本教育会館、2015.5.15

肥爪周二「山県大弐の悉曇学と国語音声観察」近代語学会、白百合女子大学、2014.6.21

[図書](計 2件)

沖森卓也・肥爪周二編『漢語』(沖森卓也との共編、朝倉書店、2017.10、pp.51-78、計168ページ)

肥爪周二 解説「『反音作法』伊呂葉字平它」(大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇14『伝記・願文・語学等』、汲古書院、2016.9、pp.32-35、37-39)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

取得年:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

肥爪 周二 (HIZUME, Shuji)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号: 70255032